# [旧版] 食事

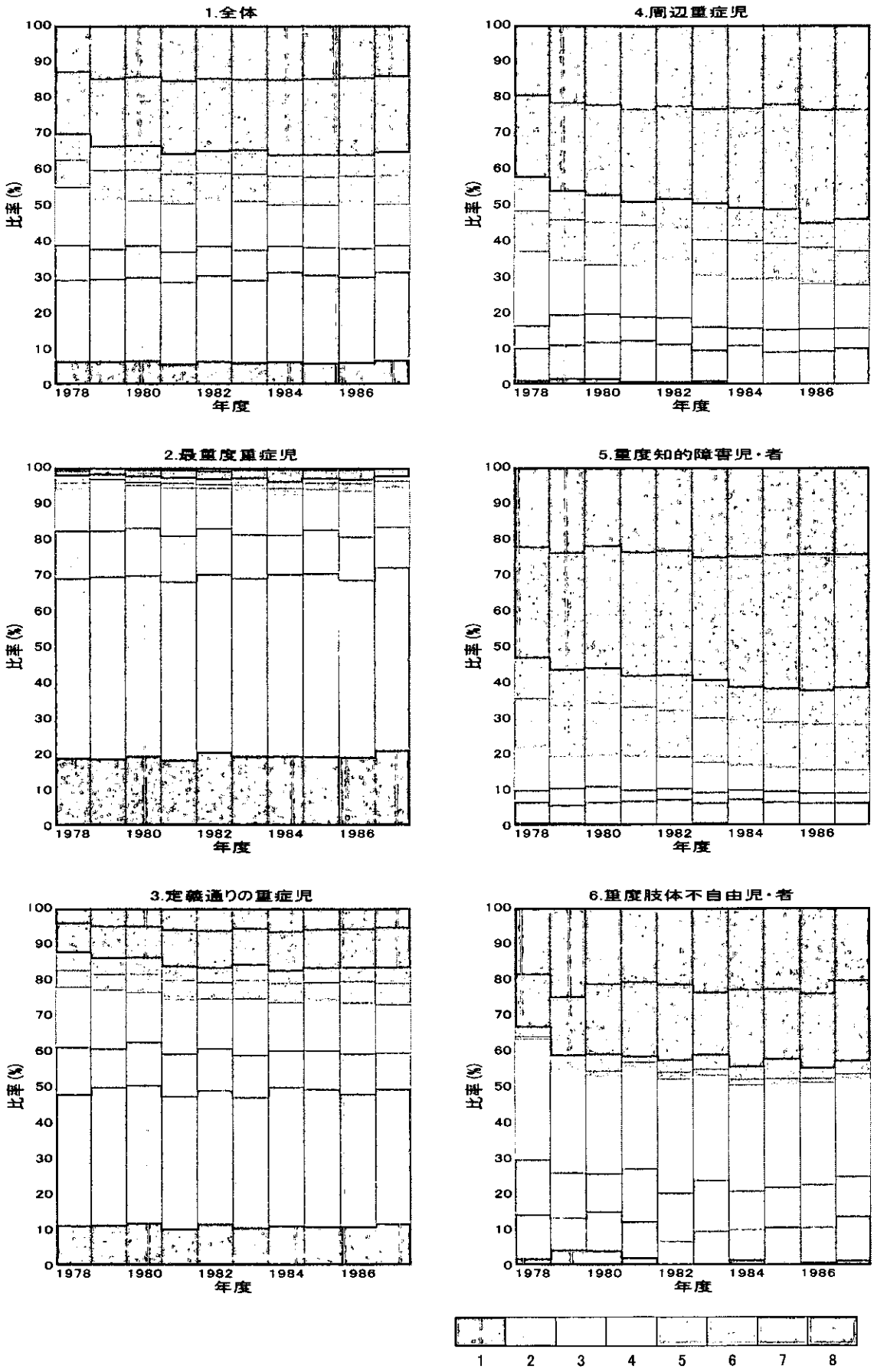
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3
4
5
6
7
8

図5-2(A)

# [改訂版] 食事における咀嚼・嚥下：嚥下

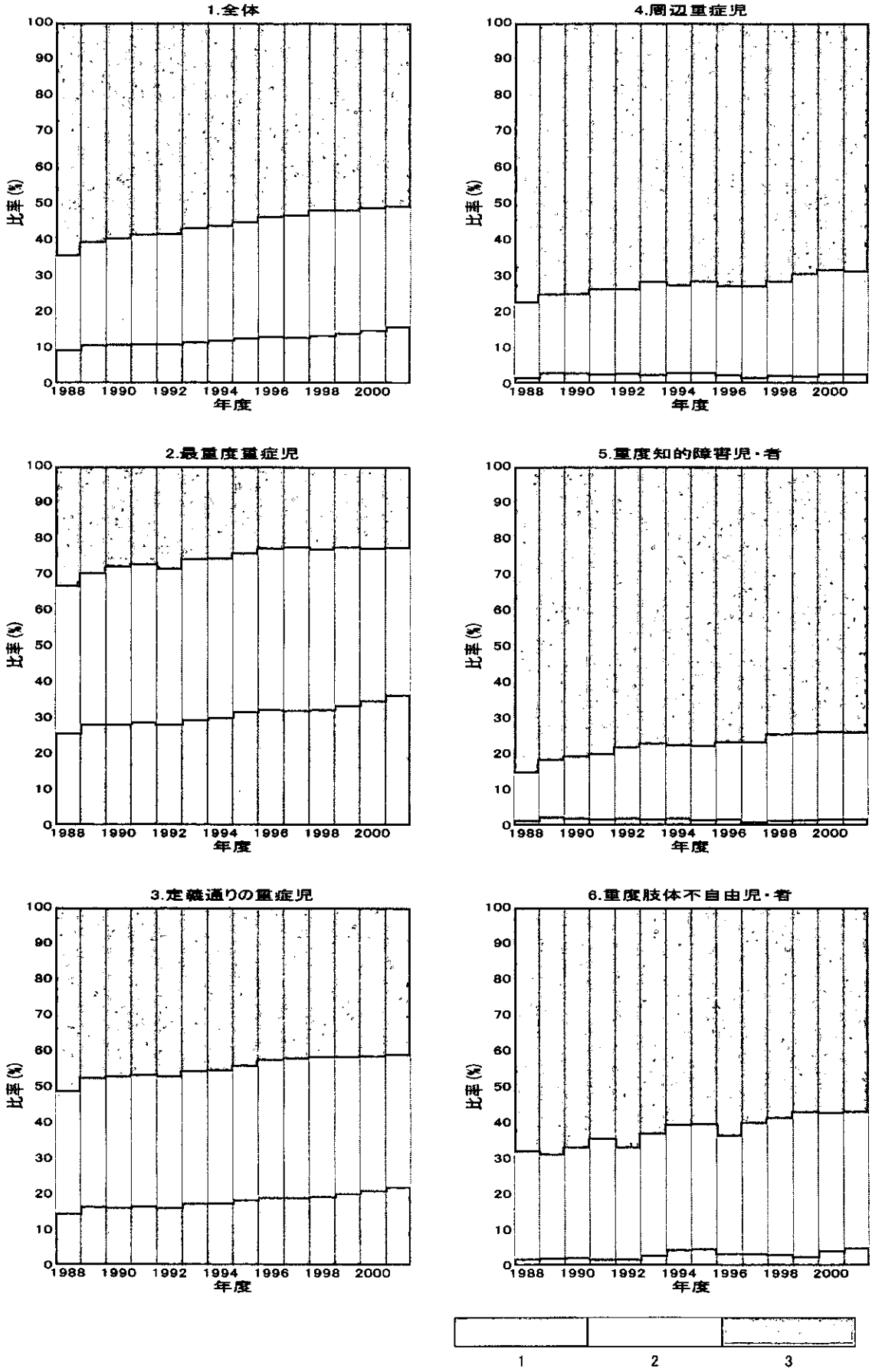


図5-2(B)

# [改訂版] 摂食方法

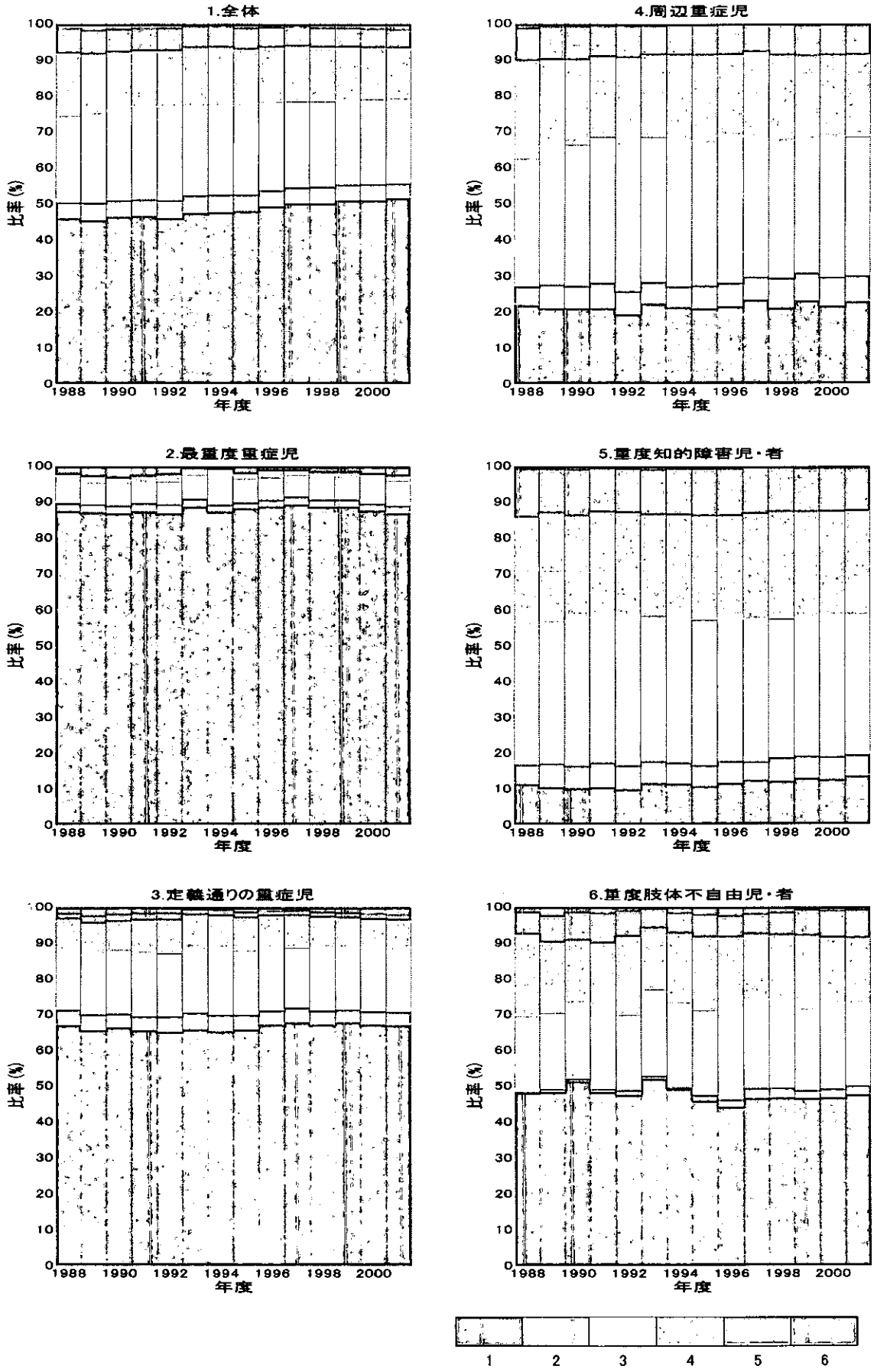


図5-2(C)

# [改訂版] 食事の介助

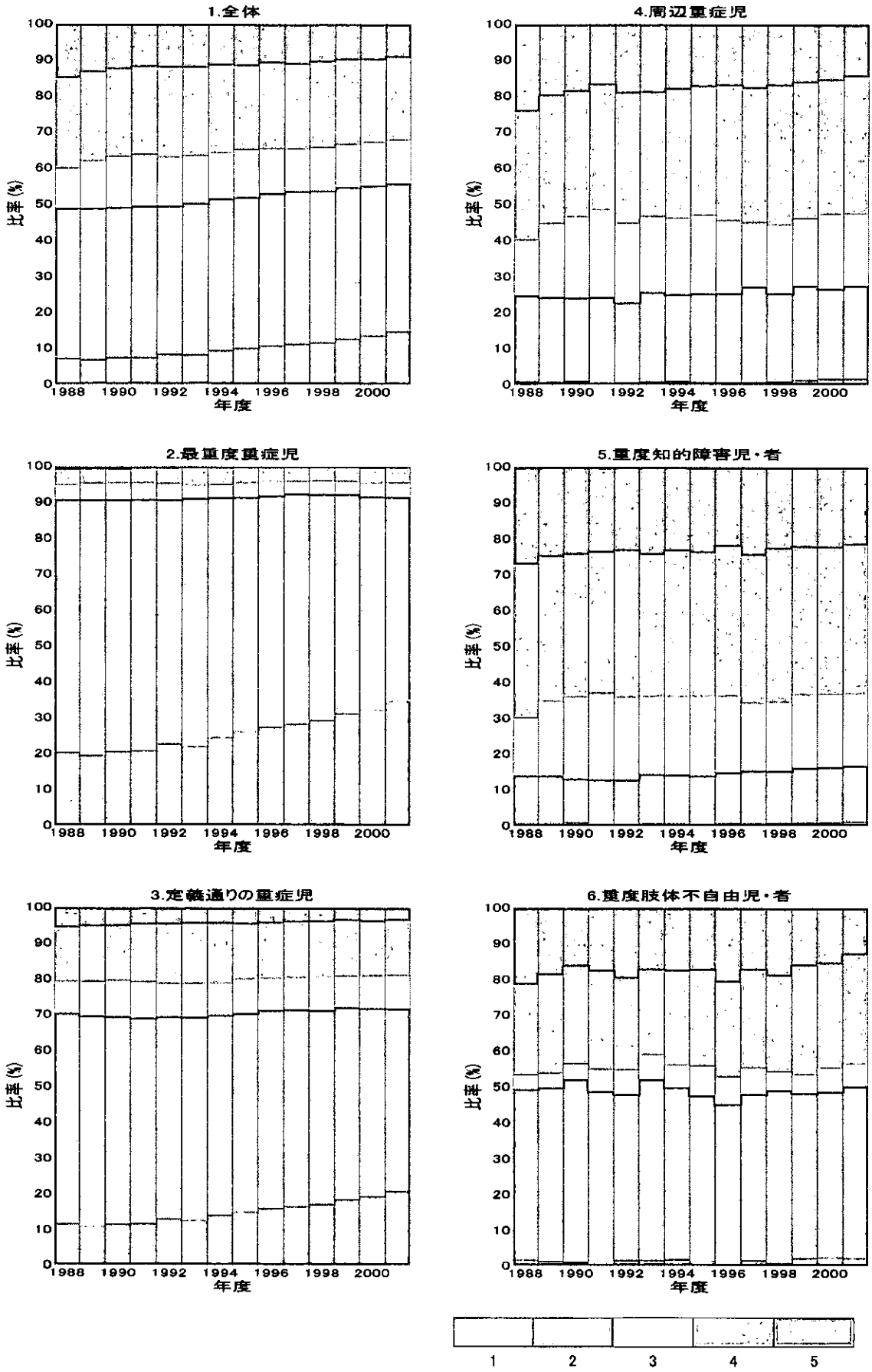


図5-2(D)

# [旧版] 食事の形態

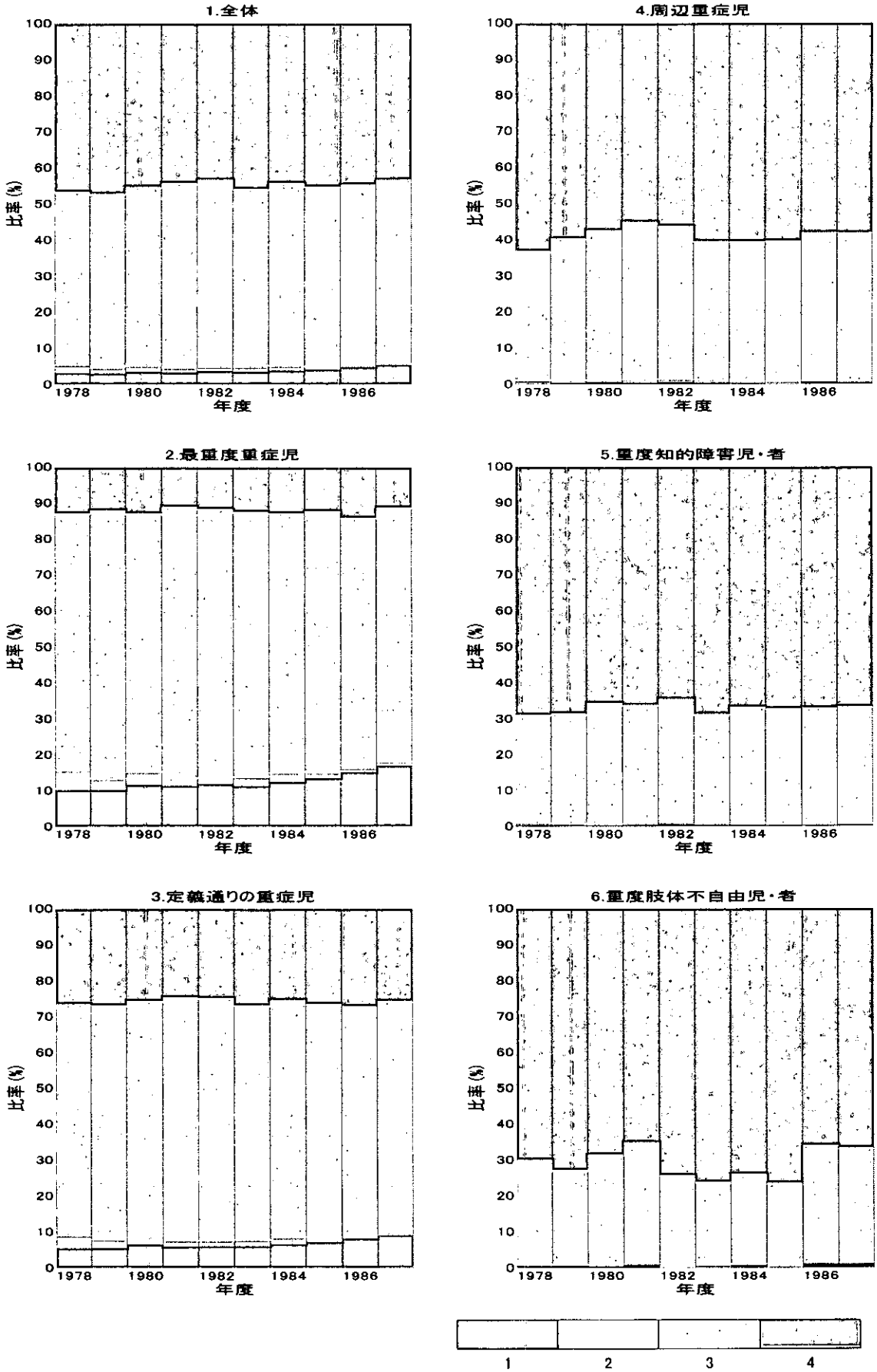


図5-2(E)

# [改訂版] 食事の形態

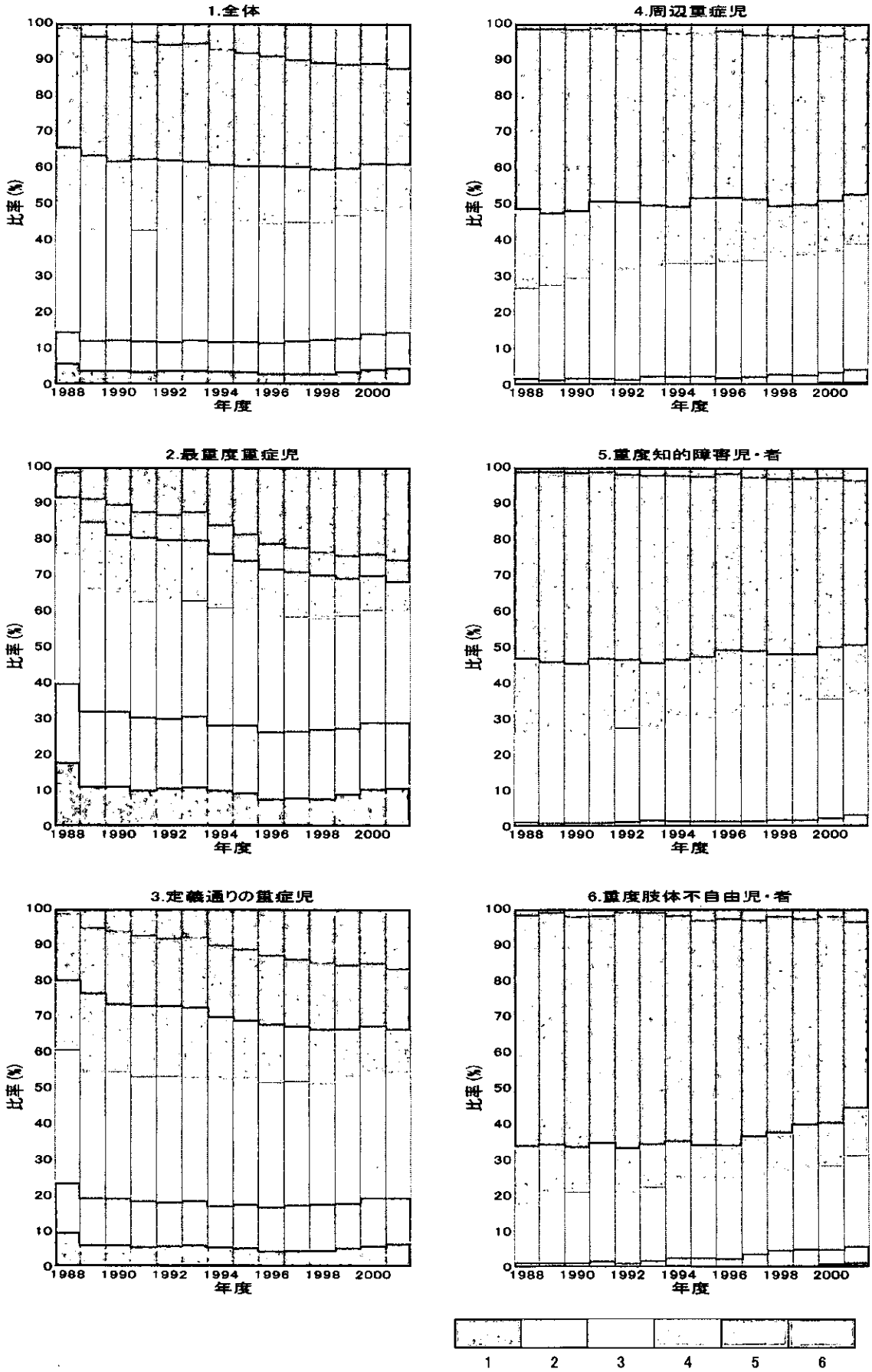


図5-2(F)

# [旧版] 更衣

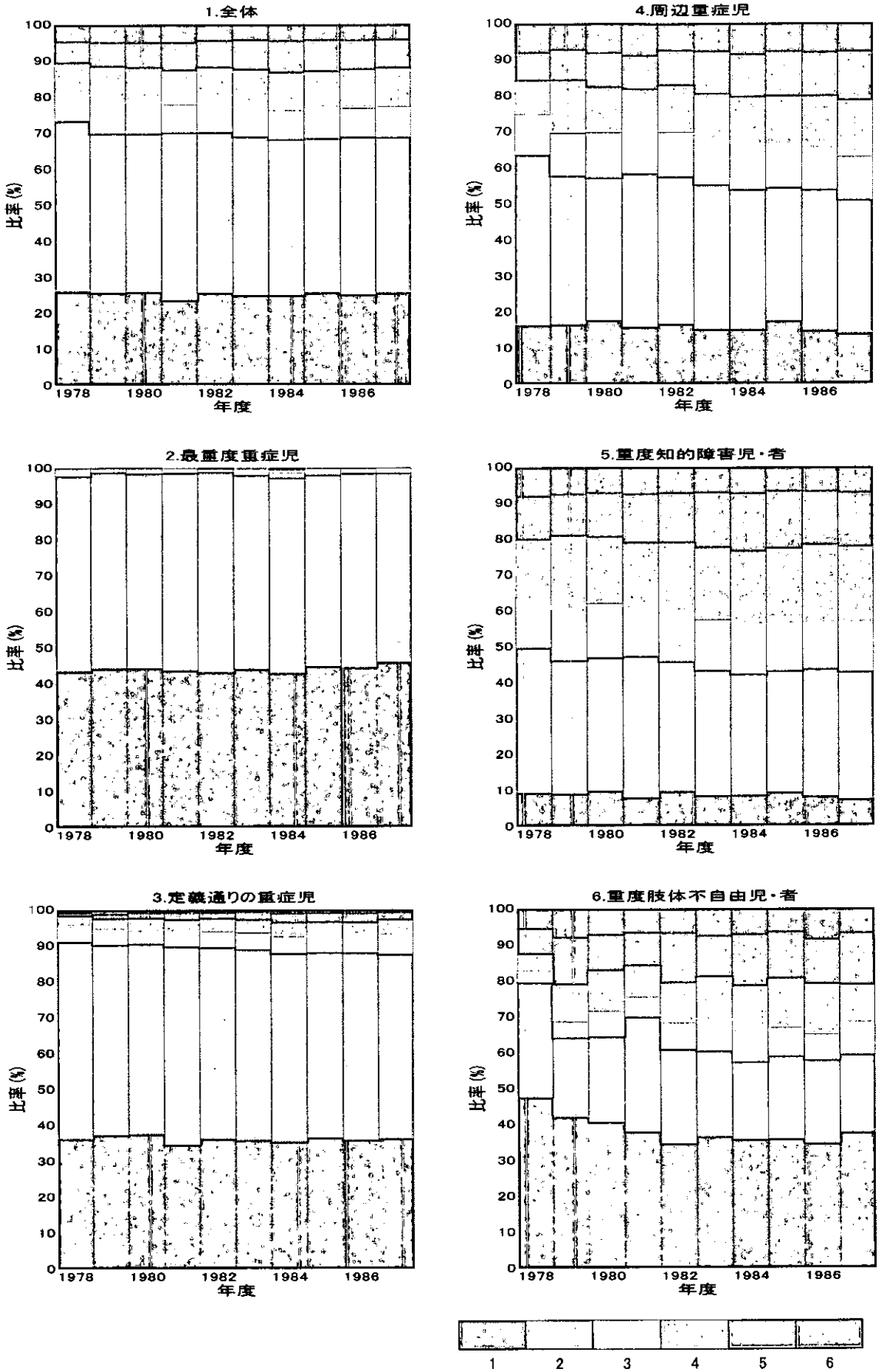
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3
4
5
6

図5-3(A)

# [旧版] 入浴

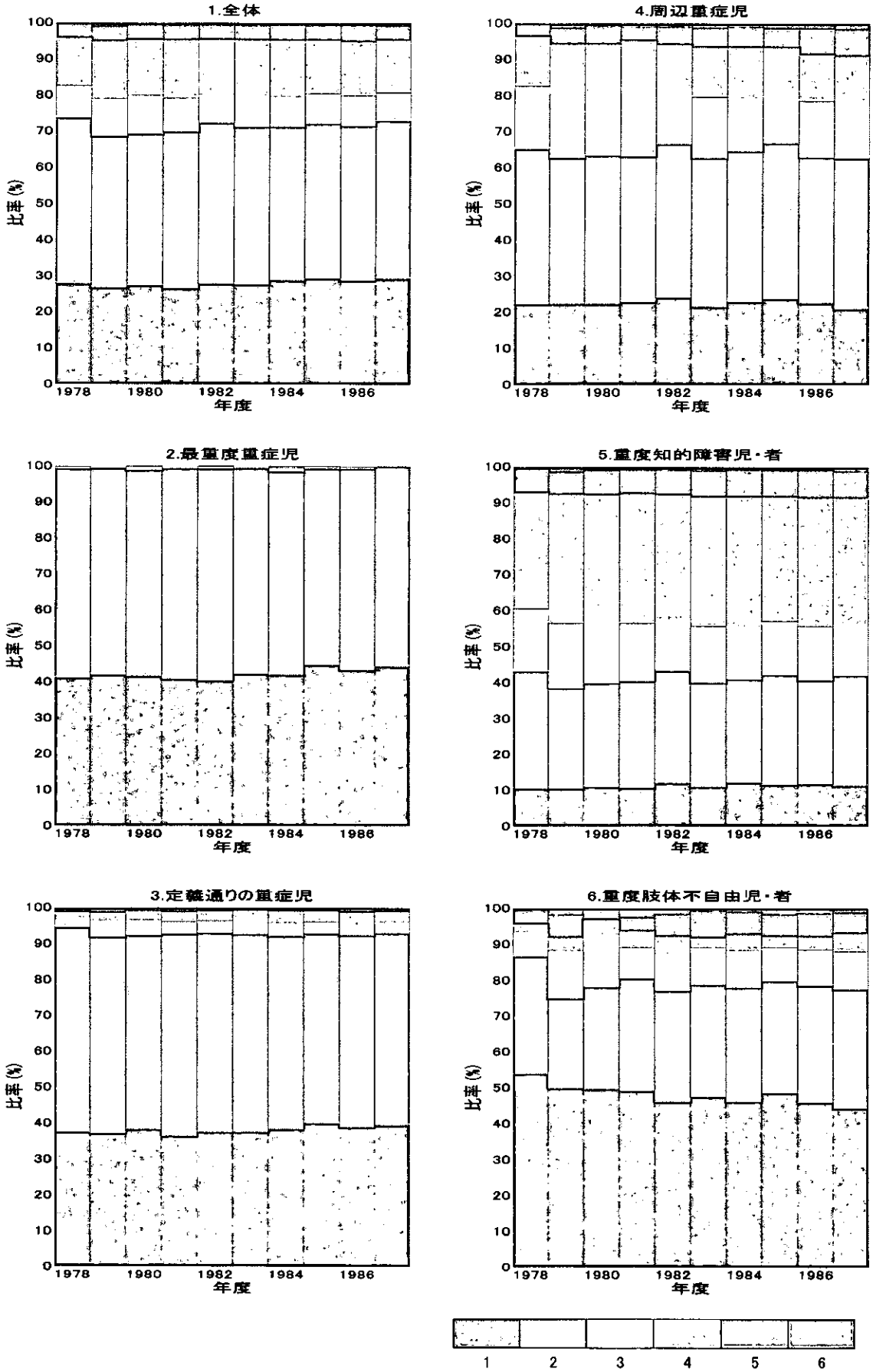
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3
4
5
6

図5-3(B)

# [旧版] 洗面

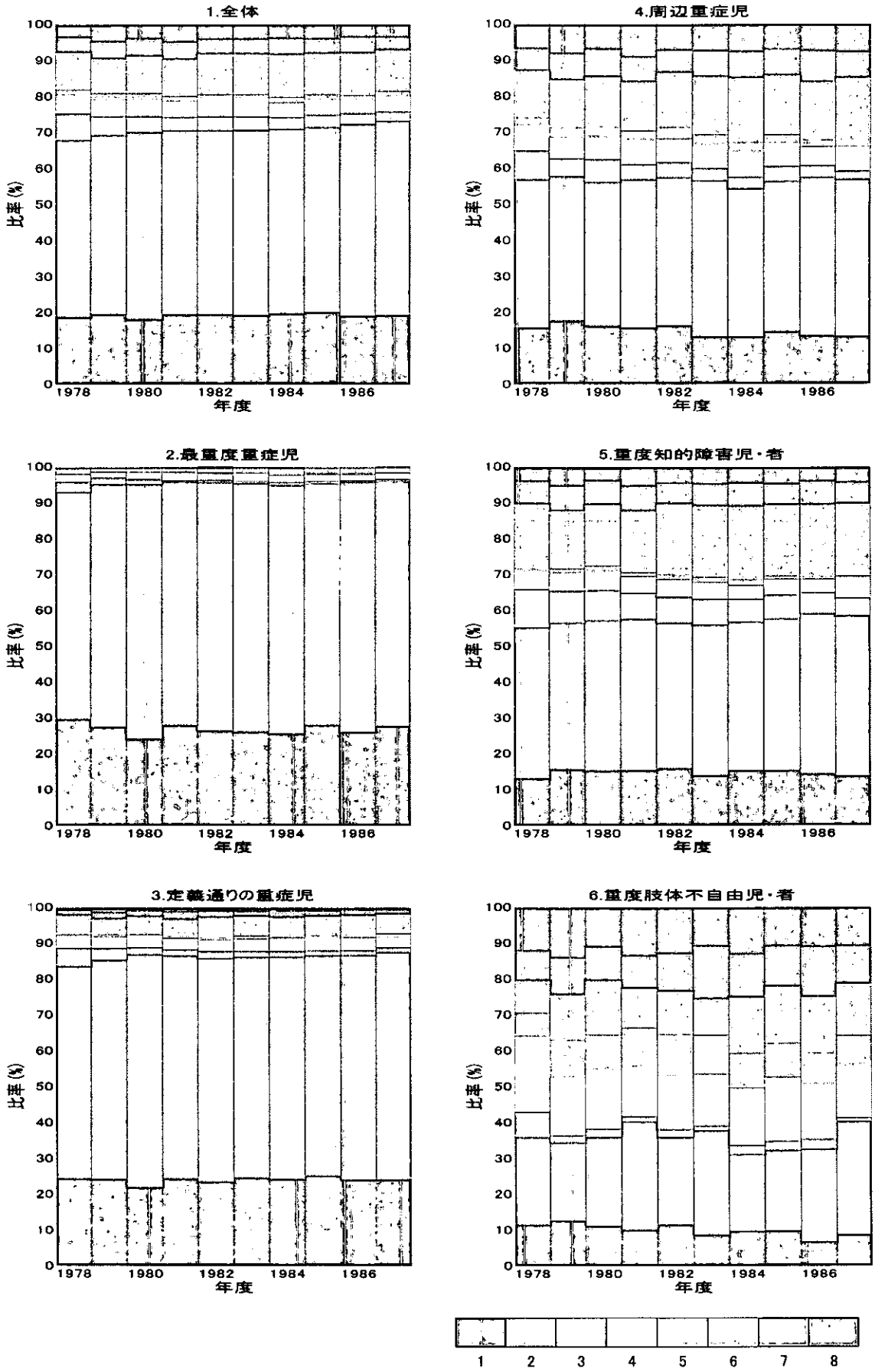
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3
4
5
6
7
8

図5-3(C)

# 6. 感覚機能

## 6.1. 視　覚

■旧版■，■改訂版■　共通

1. 全くみえないようだ
2. 光は感じているようだ
3. 視力は弱いがみえているようだ
4. 視力には問題はない

旧版の調査では，定義通りの重症児の視覚は何らかの問題がある者が 32%，最重度重症児では 45%と高かった。これらに対して，改訂版の調査では定義通りの重症児および最重度重症児の視覚はほぼ同様な傾向を認めた。なお，何れの調査でも，重度知的障害児・者ならびに重度肢体不自由児・者で何らかの問題のある者は上記２群に比べて低い値であった。

＜ 図 6-1(A)，(B) ＞

## 6.2. 聴　覚

■旧版■，■改訂版■　共通

1. 全く聞こえないようだ
2. 聞こえているようだが，はっきりしない
   （音は聞こえているようだ：改訂版）
3. 強い音刺激には，はっきり反応がみられる
   （強い音刺激には反応がみられる：改訂版）
4. よく聞こえている

聴覚に何らかの問題がある者は，旧版の調査では定義通りの重症児で約 20%，最重度重症児では 30%の頻度であった。しかし，全く聞こえないは 2%以下であった。改訂版の調査でも同様な傾向であった。なお，重度知的障害児・者および重度肢体不自由児・者では何れの調査とも何らかの問題のある者の頻度は上記２群に比べて低値であった。

＜ 図 6-2 (A)，(B) ＞

# [旧版] 視覚

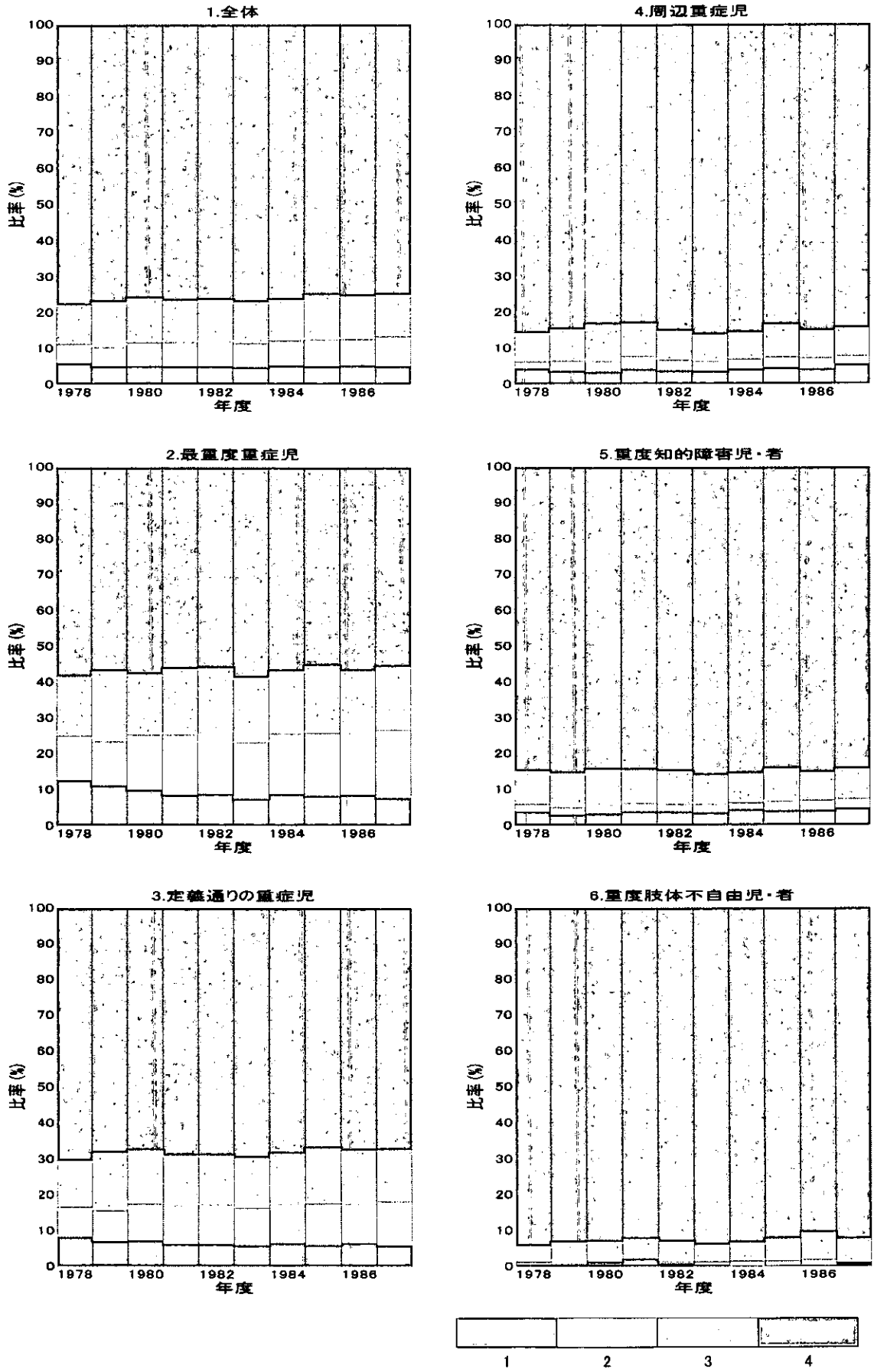
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3
4

図6-1(A)

# [改訂版] 視覚

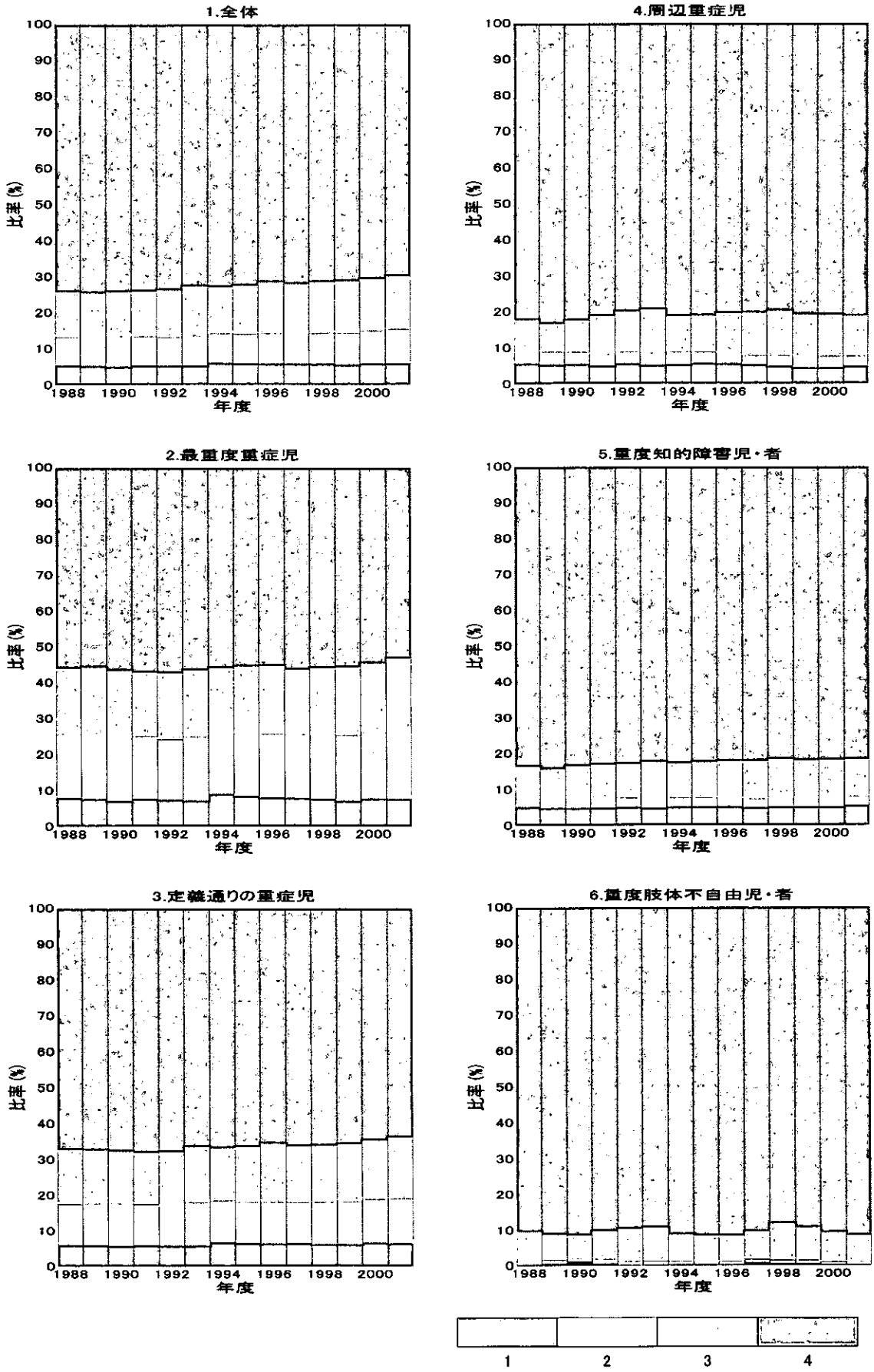
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1988 1990 1992 1994 1996 1998 2000
1
2
3
4

図6-1(B)

# [旧版] 聴覚

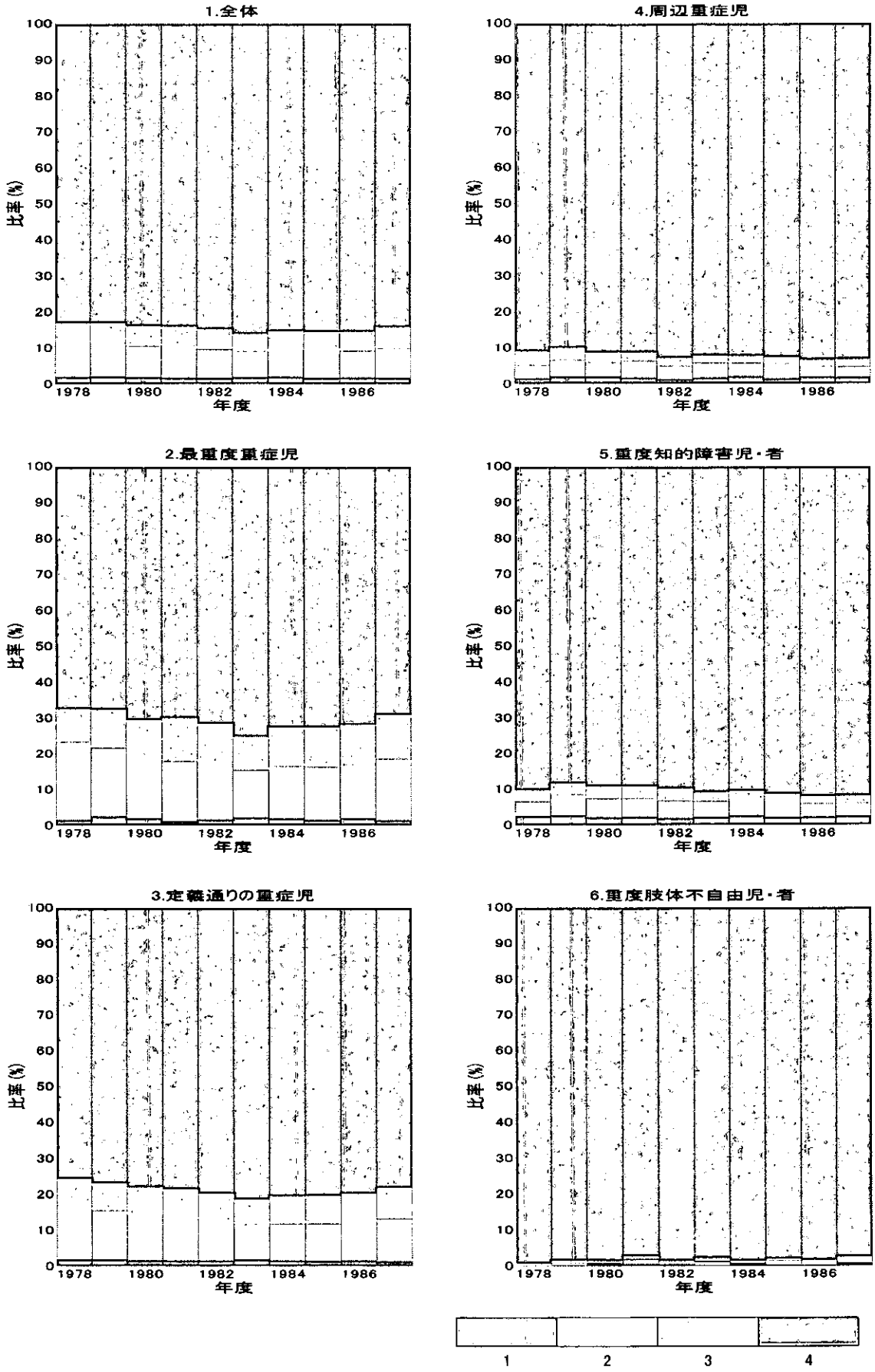
1.全体
2.最重度重症児
3.定職通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3
4

図6-2(A)

# [改訂版] 聴覚

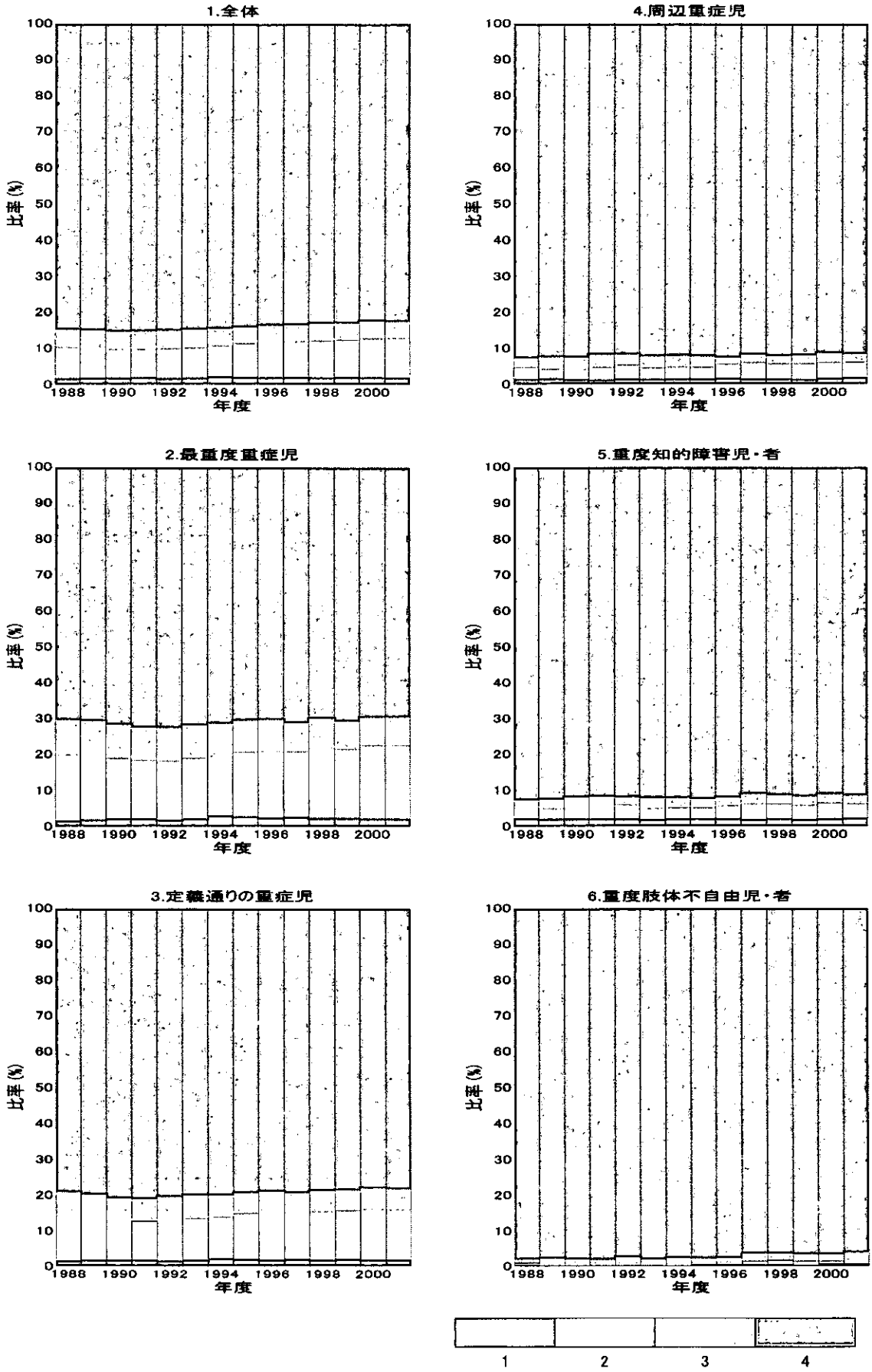
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1988 1990 1992 1994 1996 1998 2000
1
2
3
4

図6-2(B)

# 7．知的能力

## 7.1. 遊び

■旧版■

1. 何もしないでいる
2. 一人遊びをする
3. 他児の遊びを見ている
4. 大人を媒介として他児と遊ぶ
5. 仲間遊びができる

■改定版■

1. 遊びらしいものは全くみられない
2. 何かを楽しんでいる様子がある
3. ひとり遊びをする
4. 他児の遊びをみている
5. 大人（職員や家族）と遊ぶ
6. 大人（職員や家族）を介して他児と遊ぶ
7. 仲間遊びができる

「遊び」については，「遊びらしいものは全く見られない」から，「仲間遊びできる」まで，7 段階に分けて評定した。「全体」では，年度を通じて「何かを楽しんでいる様子がある」と「一人遊びをする」が最も多く，それぞれ 20%～30%を占めている。ついで，「遊びらしいものは全く見られない」と「大人（職員や家族）と遊ぶ」が，10～15%程度と続いている。障害程度別でみると，最重度重症児と定義通りの重症児では，当然のことながら「何かを楽しんでいる様子がある」が，もっとも多く，それも年度とともに，その比率が増加している（1989 年の 20%台から 30%台へ）。それに対して，重度肢体不自由児・者では，ほとんどが「仲間遊びが出きる」と「大人（職員や家族）を介して，他児と遊ぶ」で，占められている。周辺重症児と重度知的障害児・者は上記２群の中間に位置する分布であった。

＜ 図 7-1 (A)，(B) ＞

## 7.2. コミュニケーション（理解）

■旧版■

1. 働きかけに全く，またはほとんど反応しない
2. 身体的摂食に反応する
3. 話しかけに反応する
4. 単語の意味を理解する
5. 日常会話を理解する

■改定版■

1. どんな方法で働きかけても全く分からない
2. 何らかの方法で働きかけると多少は理解する
3. 簡単な言葉や身ぶりなどを理解する
4. 日常会話を理解する

コミュニケーションのうち，「理解能力」については，「どんな方法で働きかけても全く判らない」から，「日常会話を理解する」まで，4 段階で評定した。その結果，「全体」では「何らかの方法で働きかければ多少は理解する」が最も多く，年度を通じ，約半数を占めている。ついで，「簡単な言葉や身振りなどを理解する」が，20%前後を占め，残りは「どんな方法で働きかけても全く判らない」と「日常会話を理解する」が，ほぼ同率であった。障害程度別では，最重度重症児と定義通りの重症児では，「何らかの方法で働きかけると多少は理解する」が，全体の 6 割近くを占めている。それに対し，重度肢体不自由児・者では，「日常会話を理解する」が 90～95%を占めている。そして，周辺重症児と重度知的障害児・者は，上記の 2 群の中間に位置する比率を示している。

＜ 図 7-2 (A)，(B) ＞

## 7.3. コミュニケーション（表現）

■旧版■

1. 表現手段がない
2. 意味の分からない声や，意味の分からない身ぶりで表現する
3. 単語や意図した身ぶりで表現する
4. 二語文で表現する
5. 文章で表現する

■改定版■

1. 意思表示が全くないようだ
2. 意味は分からないが声や身ぶりで表現する
3. 意図した身ぶりやサインで表現する
4. 単語で表現する
5. 二語文で表現する
6. 文章で表現する

コミュニケーションのうち，「表現能力」については，「意思表示が全くないようだ」から「文章で表現する」まで，6 段階で評定した。その結果，「全体」では，「意味はわからないが，声や身振りで表現する」が，最も多く，全体の 50%余りを占め，ついで，「意図した身振りやサインで表現する」と「意思表示が全くないようだ」が，それぞれ 15%前後を占めていた。障害程度別でみると，最重度重症児と定義通りの重症児では，「意味はわからないが，声や身振りで表現する」が，6 割以上を占め，年度推移とともに，若干比率を増している。さらに「意思表示は全く無いようだ」が多く，20～30%近く占めている。それに対し，重度肢体不自由児・者では，「文章で表現する」が 60%前後を占め，「意思表示は全く無いようだ」は，ゼロで，「意味はわからないが，声や身振りで表現する」も数%にとどまっていた。ここでも，周辺重症児と重度知的障害児・者は，両群の中間に位置付けられるレベルを示していた。

＜ 図 7-3 (A)，(B) ＞

# [旧版] 遊び

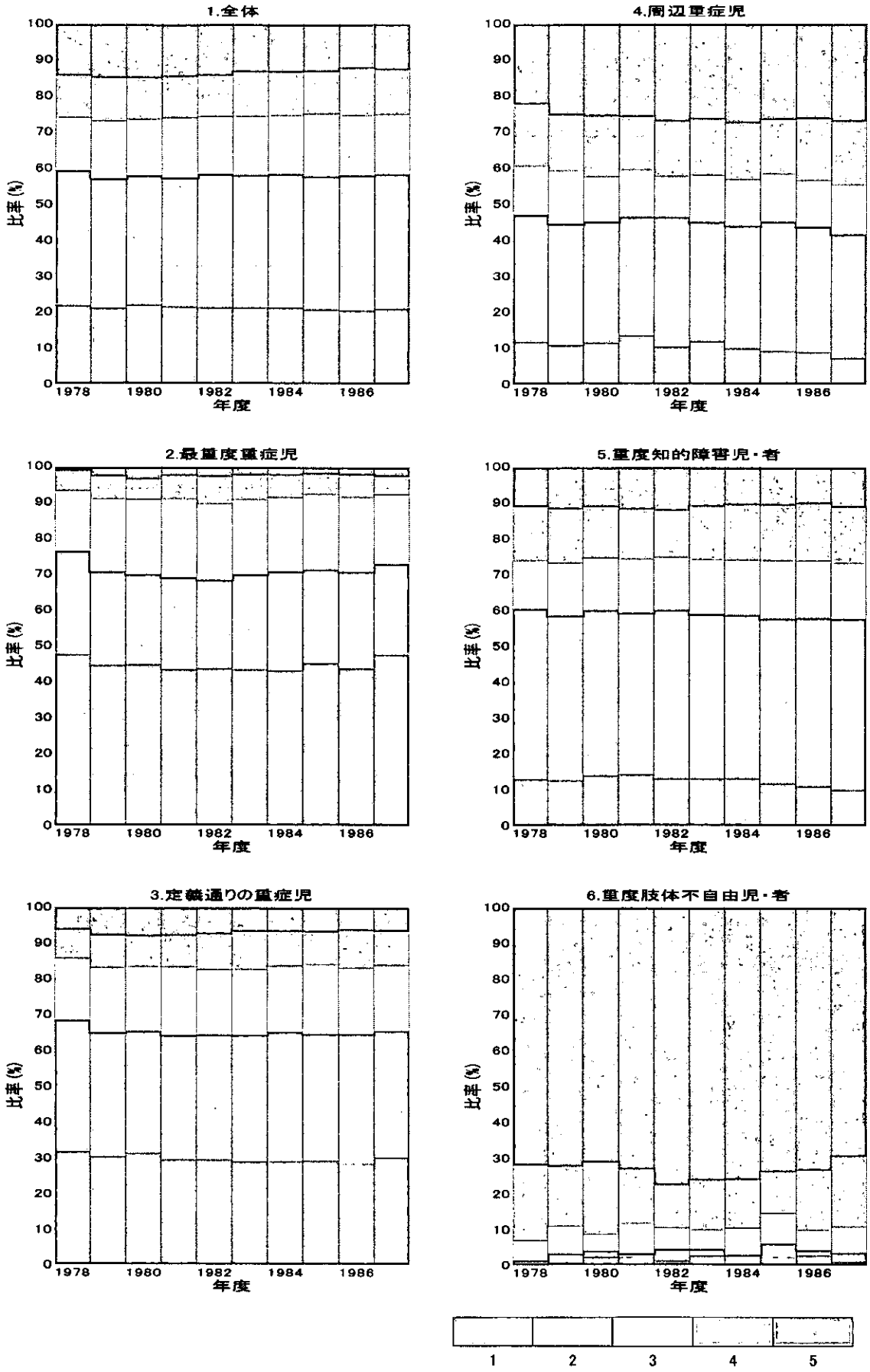
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1978
1980
1982
1984
1986
1
2
3
4
5

図7-1(A)

# [改訂版] 遊び

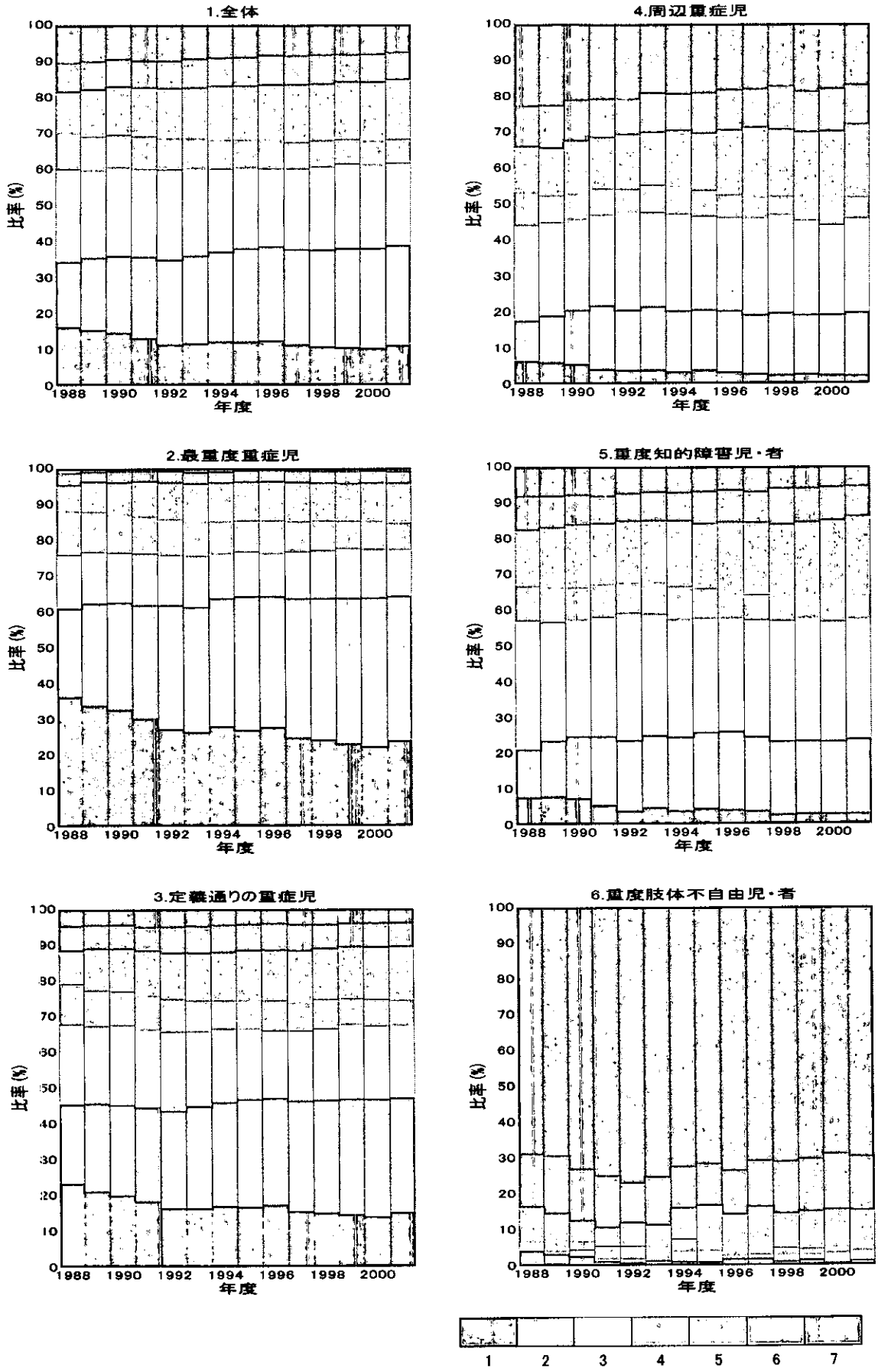
1.全体
2.最重度重症児
3.定義通りの重症児
4.周辺重症児
5.重度知的障害児・者
6.重度肢体不自由児・者
比率(%)
年度
1988 1990 1992 1994 1996 1998 2000
1 2 3 4 5 6 7

図7-1(B)

# [旧版] コミュニケーション：理解

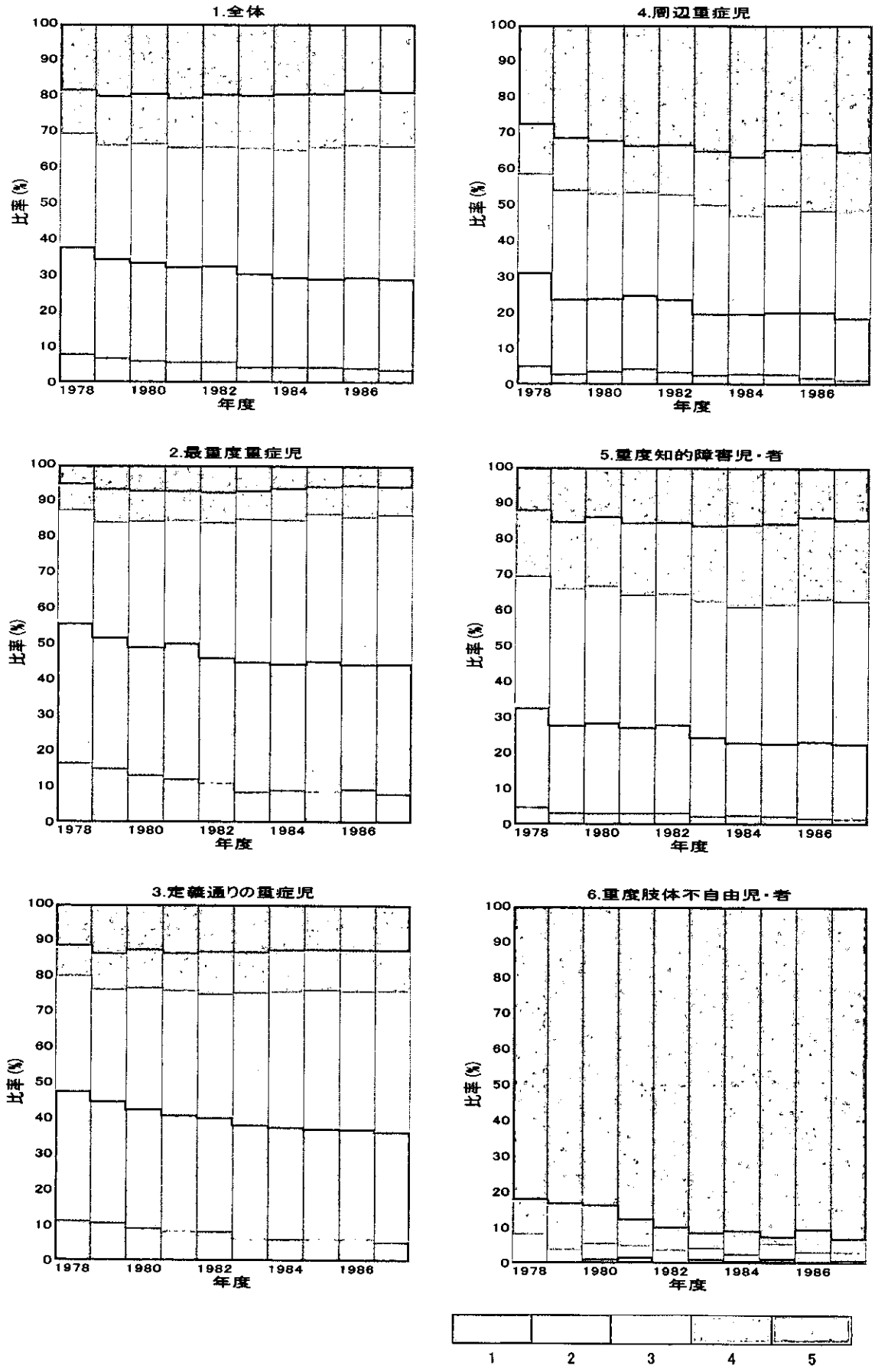


図7-2(A)